

# 詠詞

五月号



花鳥詠

5月号 (434号)

日本伝統俳句協会

# 花鳥諷詠<sup>®</sup>

令和6年5月 ■ 第434号 ————— 目次

---

花鳥諷詠選集 .....	今橋眞理子 ..... 2
	須藤 常央 ..... 4
この人の作品 .....	田中 祥子 ..... 7
一頁の鑑賞 .....	如月 真菜 ..... 8
	内藤 花六 ..... 9
卯浪 .....	.....10
虚子研究 『六百五十句』 研究 (51) .....	.....11
虚子を知るためのガイド	
一生誕百五十年に寄せて .....	井上 泰至 .....18
風報 .....	.....22
<b>俳句がよくわかるオンライン講座</b>	
協会賞とオンライン講座 .....	真篠みどり .....25
「俳句の良き仕上がりのために～送り仮名～」体験記	
.....	菅谷 糸 .....26
新入会員 .....	.....28
<hr/>	
地区行事開催日程表 .....	.....31
編集後記 .....	.....32

---

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 虚子輯『さしゑ』より「つり」中村不折画

# 花鳥諷詠選集

## 今橋眞理子 選

### 特選五句

避難所の隅に一人の受験生

明石梅村 節子

目の前に吹かれ寄りきし枝垂梅

長岡安原 葉

早春の光捉へて鋏を振る

堺 杉山 千恵子

歳月をうかと思らせ花の種

北海道 伊藤 ていこ

寒の水足して墨する写経かな

春日 牟田 節子

### 二句短評

一句目——元日の能登半島地震は日本中を震撼させ、刻々と報じられる避難所の現状にも胸が痛んだ。そんな避難所の隅に一人の受験生がいる。人生の試練でもある受験をその状況で乗り切るのは、どんなに大変なことか察するに余りあるが、そこには未来があり、その姿は一筋の光明のようにも思われる。

二句目——細い枝を四方に垂らした枝振りの美しい枝垂梅である。上五、中七の表現から、その枝垂梅に吹く一陣の風が見えてくる。枝先だけでなく梅の香も吹き寄せられてきたことである。心の昂りの一瞬の情景を切り取って、余情がひろがる。

### 入選六十句

菟藟を色のはみ出す針供養 神戸 玉手のり子

子らの来てとんど準備の竹運ぶ 君津 榎本 静江

突堤に満ちくる潮の淑気かな 福山 佐藤 浩子

御嶽の全容は稀寒日和 名古屋 斉藤 始子

奥宮の静寂を破る猫の恋 春日 永利五十鈴

ベビーカー降りて幼も青き踏む 福岡 梶原 敏子

まづ御慶述べ診察の始まりぬ 大阪 山内 繭彦

今日人に会はず暮るるや根深汁 鳥取 石尾 正子

ゆたんぼの力尽きたる朝なりし うきは 金子 清黙

雨上り梅の香のまた新しき 香川 福家 市子

欠けし手をまづは包みて雛納 高知 駒木 基克

下萌や光を運ぶ水の音 鹿児島 柳橋かすみ

病にも退院と言ふ春来る 高知 岡林知世子

老いてなほ計画あまた地虫出づ 熊本 隈部 輝子

芝焼く火広げて消してゐる帚 鳥原 三好 勝利

日脚伸ぶついつい家事の遅れがち 宇部 縄田 悦子  
 傘に積む雪の重さの確とあり 行田 細村 雅子  
 餌投げて鯉と春愁分かち合ふ 市川 抜井 諒一  
 白魚の網ふくれつゝ沈みけり 阿南 かつせ千津  
 若布篋張る小鳴門の航路まで 鳴門 西内 千秋  
 春立つや吉祥天のうす衣 柏原 鈴木兵十郎  
 綺羅星の掬へさうなる雪の宿 高崎 津久井洋子  
 梅が香を少し動かす程の風 福岡 下原口允子  
 想像もつかぬ未来へ木の実植う 下関 中村 元代  
 うす紅の萼よりひらき梅真白 習志野 大慈弥爽子  
 渦潮を避けてくり出す若布刈舟 稲城 藤田惠美子  
 初場所の火照り隅田の風に解く 石川 駒形 隼男  
 早春の光を束ね菜を出荷 西宮 山之口倫子  
 一声に翔ちたる鶴の峙へと 阿南 鎌田 黄鳥  
 落雪の音にも目覚め余震の夜 南砺 有川 寛

大琵琶の片隅借りて魃を挿す 堺 山戸 暁子  
 俳諧の淡き交はり冬桜 荒尾 大川内みのる  
 節分の鬼に抱かれて泣き出しぬ 高松 佐保美千子  
 なりはひの針のさまざま針供養 神戸 小柴 智子  
 冬ぬくしずつしり重き募金箱 熊本 木村佐恵子  
 山よりも都会に生きて寒鴉 袋井 湖東 紀子  
 残雪の嵩は胸まで奥社 米子 中村 襄介  
 九十の端は忘れ春耕す 西予 末光惠美子  
 本殿は裸電球里神楽 宇佐 水野 公明  
 雛の灯をともし二人の夕べかな 松山 門田 智子  
 朝市の菜よりよく売れ水仙花 神戸 三木 雅子  
 山菜莢の黄の濃くなりし雨上がり 長岡 今井 芳子  
 退院の一步を旅と呼んで春 西東京 今井 名津  
 春時雨庇を借りる旅衣 八尾 藤井ケイ子  
 早春の日射しに押され畑仕事 神戸 藤丸千香子

● 須藤常史 選

特選五句

光陰やまた巡りくる汀子の忌

今治横田青天子

復興の春朝市の輪島より

岡山大野文子

地震一夜明けて二日のレクイエム

山形揚妻愛子

煮凝になるも武者めくかさごかな

高松森本添水

たましひの抜けるかに塚かげろへり

八代山下しげ人

二句短評

一句目——二月二十七日は汀子先生の忌日である。ただ受け止められないとの思いの方も多くおられることであろう。ただ、掲句の作者は自身の光陰の中にすでに師の忌日を確かなものとして捉えているようだ。師の志を引き継いで、伝統俳句の道を歩み続ける作者の思いが伝わる。

二句目——一月一日に発生した能登半島地震は、翌二日となり予想外の被害の大きさで驚かされたが、ここに来て何とか復興の兆しも見えて来ているようだ。何より輪島の朝市がそれを象徴している。掲句の作者も花鳥諷詠詩を心の支えとして未来に向かって歩んでいるに違いない。

除雪車の音に始まる朝支度	<small>鳥取</small>	砂流	<small>育子</small>
麦踏や影も光も踏みしめて	<small>東京</small>	篠崎	<small>千春</small>
保育器に春待つ吾子の大欠伸	<small>太宰府</small>	野田	<small>杉子</small>
大楠や三千年の春を抱き	<small>諫早</small>	外輪	<small>ふみえ</small>
豆腐にはさして罪なく針供養	<small>東京</small>	黒島	<small>流世</small>
今一つ打たん札所や日脚伸ぶ	<small>名古屋</small>	山口	<small>勝行</small>
門松や学習塾も銭湯も	<small>鹿児島</small>	岡村	<small>るみ子</small>
早梅の庭に旅の荷降ろしけり	<small>鹿児島</small>	手打	<small>桃果</small>
厨房にはねとぶうろこ桜鯛	<small>倉敷</small>	田中	<small>恵美子</small>
瀬戸の海背にして登る梅の坂	<small>防府</small>	藤井	<small>汎水</small>
一雨に膨らむ白さ春障子	<small>神戸</small>	松元	<small>一師</small>
山門の階一步より初音	<small>熊本</small>	粟津	<small>玲子</small>
まんさくや峡の日差しの濃くなりぬ	<small>岡山</small>	山口	<small>喜代子</small>
山焼いて山のひととせ始まりぬ	<small>神戸</small>	高橋	<small>純子</small>
罹災地の安否伺ふ初電話	<small>金沢</small>	矢木	<small>桂子</small>

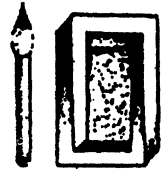
入選六十句

左義長やえびす大黒火の海に 今治 比留木のぶ子  
蓋のなき椀に大盛り蜆汁 松江 小村 四温  
鉄棒に手が凍りつく逆上がり 苦小牧 杉山 桂子  
霜柱踏めば朝の声がする 熊本 井芹真一郎  
速達で届きし投句初句会 北海道 西澤カズ子  
延々とお経の如く河豚の糶 高知 森脇 杏花  
紙を漉く水揺らしてはなだめては 八尾 米澤 悦子  
冬の星夜風に降つてくるやうな 金沢 中村 曜子  
湯婆の余熱に絶る朝かな 富津 秋廣このみ  
被災地に追討ちの雪降り続く 神戸 島崎すずらん  
春寒やベレー帽とはよき伴侶 浜松 朝井 治代  
下萌や光を運ぶ水の音 鹿児島 柳橋かすみ  
窓の闇いよよ強まる冬灯 東大阪 中田 豪起  
ふくよかな顔見せに来る寒雀 金沢 森田 康夫  
卵白のやうな天日冴返る 狭山 鈴木謙二郎

悴む手振つて避難の子を送る 金沢 篠島 安子  
村といふ絆を守りて小正月 鳥取 長安 節子  
太陽を見つめすぎたる露の臺 箕面 須知香代子  
漫ろ歩す香りの宇宙梅の園 伊万里 大久保花舟  
鉄塔の電線無色冴返る 総社 劍持 章子  
激震や転げ落ちたる鏡餅 小松 橋本 正乃  
二月くる光の扉開くるかに さぬき 原 道子  
遮断機の降りて汽車行く月朧 北海道 高間ヨシエ  
一天の青より下りて来る余寒 浜田 福本 正嚴  
雪達磨のつべらぼうになりけり 龍ヶ崎 油原めぐみ  
手袋を外し試食の爪楊子 山口 椿 壽子  
明日の色抱きしまま萎え冬薔薇 南国 高橋 以登  
看護婦の見廻り赤のカーデガン 鯖江 山岸詩明  
白魚の網ふくれつ、沈みけり 阿南 かつせ千津  
春立つや吉祥天のうす衣 柏原 鈴木兵十郎

綺羅星の掬へさうなる雪の宿 高崎 津久井洋子  
 さざ波は風のあしあと水温む 弘前 藤田 豊子  
 花のごと鯉浮かびくる四温かな 西宮 山谷 彰子  
 冬雲のどんよりまるで我のやう 小郡 西田 淑子  
 改札を出れば早春花売場 札幌 菊地 勝弘  
 想像もつかぬ未来へ木の実植う 下関 中村 元代  
 黒船を見る水仙の宿に着く 東京 齋藤 澄子  
 臨時駅停まる特急梅まつり 水戸 相澤 正明  
 初場所の火照り隅田の風に解く 石川 駒形 隼男  
 落雪の音にも目覚め余震の夜 南砺 有川 寛  
 寒明けて遠しと思ふ昨日かな 大牟田 森永 清子  
 追ひつきて棹に連なる鵠かな 安来 細田 洋子  
 水流を束ぬるごとく寒天干す 静岡 堀内 智子  
 朝市を引つ繰り返し冬の地震 磐田 金田みな子  
 山よりも都会に生きて寒鴉 袋井 湖東 紀子

本殿は裸電球里神楽 宇佐 水野 公明  
 雛の灯をともし二人の夕べかな 松山 門田 智子  
 薄水の透けてるやうで透けてゐず 名古屋 中野ひろみ  
 鳥どちに囀され梅の含みたる 加古川 長谷川美幸  
 波の花散らして迫る怒濤かな 穴粟 堂元 節子  
 啓蟄の穴もおどろく掘削機 四日市 伊藤 和子  
 戦意まだ鎧にこもり義仲忌 三田 吉村 玲子  
 電線のどつと膨らみ寒雀 宝塚 二瓶美奈子  
 歳月をうかと思はせ花の種 北海道 伊藤ていこ  
 夫の声まだ外にあり日脚伸ぶ 井原 齋藤ノブ子  
 軒水柱薙ぎ払ひゆく竹箒 前橋 戸所 理栄  
 厨房にはねとぶうろこ桜鯛 倉敷 田中恵美子  
 一雨に膨らむ白さ春障子 神戸 松元 一師  
 探梅の一輪の香に山日濃し 宮若 菅井久美子  
 人ごみにさらに人寄り苗木市 ふじみ野 清水 雪花



## 編集後記

伊予に生まれ相模に老いて更衣 虚子

松山も鎌倉も海に近いし、山もある。「更衣」という更新の時間の堆積も、字余りで始まる地名のイメージの連鎖によって実感が湧く。自分を育んだ風土への思いは、ひとしおであったようだ。と同時に季題の力、というものを思い知らされる句である。

●総会の通知葉書は届きましたでしょうか？ 期限までに出欠をお知らせください。欠席の場合は、委任状に必ずご記載ください。

●総会では、参加される皆さまの懇親

の邪魔にならないよう、固定式の座席でなく行う予定です。型があり、師の選がある俳句は、一般の文学とは違います。シンポのパネラーの皆さんは、陶芸・茶道・謡曲といった俳句に通じる「芸」の世界もご存知です。当日は軽妙なトークで、俳句へのヒントを得る、フランクなものにしたいと思っております。ご期待ください。

●九月の全国大会の講演者岸本尚毅氏の『新編虚子自伝』の刊行もあり、生誕一五〇年に寄せて、読書ガイドを書いてみました。虚子の揮毫も挙げた『虚子百句』は、オンライン講座でも取り上げます。

●秋から花鳥諷詠選の選者の顔ぶれも変わります。協会の特性を生かして、一結社や特定の世代に偏らないよう、さらに工夫してまいりたいと考えております。

(井上泰至)

### ●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者
8月号	5月20日	岩岡中正
9月号	6月20日	山田佳乃
10月号	7月20日	岩岡中正
11月号	8月20日	山田佳乃
		小杉伸一路
		田丸千種
		伊野部哲也

### 花鳥諷詠五月号(通巻第四三三四号)

定価一、〇〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和六年五月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シヤンプル笹塚二一B一〇一

電 話 〇三三四五五五一九一

F A X 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一―一九二